

まちづくりにおける物語性の意義に関する考察

久 隆浩¹・田中 晃代²

¹正会員 近畿大学教授 総合社会学部環境系専攻(〒577-8502 大阪府東大阪市小若江 3-4-1)

E-mail: hisa@socio.kindai.ac.jp

²正会員 近畿大学専任講師 総合社会学部環境系専攻(〒577-8502 大阪府東大阪市小若江 3-4-1)

E-mail: t-akiyo@socio.kindai.ac.jp

「物語」を空間やまちと人間との関係性と捉えたとき、それは生活を通して構築されるものであると言える。そこで本論文では、空間やまちと人間をつなぐ「生活」を、いかにまちづくりに反映できるか、について考察を加える。近代化によって、こうした関係性が希薄になり、いわゆる物語の喪失の傾向が高まったと言えるが、それを改善し物語性を活かしたまちづくりを行うためには、都市計画マスタープランを策定する前に生活マスタープランを検討し、それを都市計画マスタープランに結びつける手法を検討することが大切である。また、その手法としてまちづくりオーラル・ヒストリーが有効であることを指摘したい。こうした点を明らかにするために、本論文では、まずまちづくりにおける物語の意味を考察し、近代化によってまちづくりにおける物語がいかに変容していったかを検討した上で、これからのまちづくりの中で再び物語性を取り戻す手法について検討を加える。

Key words: community planning, master plan, narrative, oral history, problem of modernization

1. はじめに

空間やまちにおける「物語」の生成過程は以下のように考えられる。物語は、空間で起こる事象(event)がもととなっているが、それは事象そのもの(fact)ではない。語り手(narrator)が事象から記憶すべきものを選択・抽出し、そこに自らの意味を付与したうえで記憶を行う。そして、語る際にそれを想起して表現するものである。したがって、物語の内容は語り手の「イメージ」となっている。(図-1)

そうした意味では、物語は語り手の主観にもとづいており、客観的なものではない。しかし、そうであるからこそ、物語を活かしたまちづくりは、客観性・合理性を基本とした近代化やその中で発展してきた近代都市計画のあり方に一石を投じる可能性を持っている。

2. 近代化の課題と物語の意味

(1) 量的データと質的データ

社会学者の見田宗介¹⁾は、量的調査法と質的調査法について、「統計資料に代表される量的データは『たしか



図-1 物語の生成メカニズム

だが、おもしろくない』分析に終わる。それに対して、手記や自伝や日記、流行歌や文学作品などの質的データは『おもしろいが、たしかさがない』立論になりがちだ」とそれぞれの特徴を説明している。また、見田は、量的データに固有の欠点を補う質的データの特質として以下の3点を挙げている。

- 1) 追体験的な了解可能性
- 2) 総合的・多次元的な把握
- 3) 変化のプロセスや可能性に関する動的な把握

質的データは、体験にもとづいたものであるがゆえに、論文の読者にとっても追体験による了解が可能となる。また、事象から選択的に抽出した量的データと違って、

質的データは総合的・多次的に抜き出すことができる。さらに、量的データは事象からある時点のデータを静的(static)に抽出するものであるのに対し、質的データは変化を動的(dynamic)に捉えることができる。

こうした指摘は、客観性を重視するがゆえに量的データに頼りがちであった計画学研究や計画論の可能性と限界を考えさせるものでもある。

(2) 科学の知と臨床の知

哲学者の中村雄二郎²⁾は、近代技術文明を牽引してきた「科学の知」は、普遍主義、論理主義、客観主義の3つの原理によって成り立っていると指摘している。普遍主義は、「事物や自然を等質的とみなし、すべてを量的なものに還元することで、地域、文化、歴史を超えられる」とする考え方、論理主義は「事物や自然のうちに生ずる出来事は、すべて論理的な一義的因果関係で成り立っている」とする考え方、客観主義は、「事物や自然を扱う際に、扱う者の側の主観性をまったく排除して、対象化してとらえる」ことである。

これに対し、中村は、コスモロジー、シンボリズム、パフォーマンスの3つを体現した「臨床の知」の重要性を主張する。コスモロジーとは、「場所や空間を、一つ一つが有機的な秩序、意味をもった領界とみなす」こと、シンボリズムは、「物事をそのもつさまざまな側面から、一義的にではなく、多義的に捉え、表わす」こと、パフォーマンスとは、「行為する当人のわが身に相手や自己を取り巻く環境からの働きかけを受けつつ、自己のうちに受動的、受動的な在り様を含みつつ、相互作用的に行為し、行動する」ことである。

中村は言う。「科学の知は、抽象的な普遍性によって、分析的に因果律に従う現実に関わり、それを操作的に対象化するが、それに対して、臨床の知は、個々の場合や場所を重視して深層の現実に関わり、世界や他者がわれわれに示す隠された意味を相互行為のうちに読み取り、捉える働きをする。」従来の計画論が「科学の知」を根底にしていたのに対し、「物語」によるまちづくりの実践は「臨床の知」だと言える。

(3) システムと生活世界

「現象学」の提唱者である哲学者のエドムント・フッサールは、著書『ヨーロッパ諸科学の危機と超越論的現象学』³⁾のなかで、我々が生きており、経験によってなっている「生活世界」があり、その基盤の上に科学は存在しているのであるが、それが逆転し、科学的世界が客観的世界として認識されてしまっていると述べている。

この「生活世界」の概念は、ユルゲン・ハバーマス⁴⁾に引き継がれる。ハバーマスは、社会を「生活世界」と「システム」の二層構造として捉える。そして、「生活

世界」はその合理化のために、物質的再生産過程を目的合理的な経済行為と行政行為という「システム」として分化独立させると考える。彼は「脱言語化されたコミュニケーション媒体による日常言語媒体の負担免除」という意味で「生活世界の技術化」が行われると述べている。ここに、貨幣をメディアとするシステム(経済システム)と、権力メディアによって制御されるシステム(国家・行政システム)が成立する。そして、システム領域が拡大し、「システム合理性による生活世界の植民地化」が起こるのである。

こうした視点から計画論を捉えると、従来の計画論はまさしく行政システムと経済システムの上に成立したものであるのに対し、物語によって生活世界の領域を再構築することができる。

(4) 天動の世界・地動の世界

客観的世界観と主観的世界観について、「生命系の経済学」を標榜する環境経済学者の玉野井芳郎⁵⁾は次のように述べている。「これまでの科学は、自然科学であれ、社会科学であれ、人間社会からも地球からも離れて、どこか遠いところから「客観的に」眺めるという研究態度をとってきました。しかし、それは正しい研究態度ではないと思うのです。われわれは生き物なのですから、もっと主体的に、自分自身の問題として、自分自身という内側から見る世界の科学でありたいとおもうのです。いわば「天動の世界」です。」

(5) 大きな物語と小さな物語

近代化と物語の関係について考察するときに、哲学者のジャン・フランソワ・リオタール⁶⁾が提唱した「大きな物語」「小さな物語」も重要であろう。彼は『ポスト・モダンの条件』のなかで、科学と物語との葛藤について述べている。科学にとって「物語」は寓話以上の意味を持たず、知を探求するための手段として適切なものとはみなさい。しかし、科学が神話や民話、説話よりも優位であり、自らが真理の探求者であろうとするには正当化のための言説が必要である。つまり、科学もまた自身の物語を必要とする。こうした「己が唯一の正当性を担うものだ」と主張する思想」をリオタールは「大きな物語」と呼んだ。

彼は、「愛による原罪からの解放というキリスト教の物語、認識による無知や隷属からの解放という啓蒙の物語、労働の社会化による搾取と阻害からの解放というマルクス主義の物語、産業の発展による貧困からの解放という資本主義の物語」を「大きな物語」の例として提示し、こうした共通認識が支えたものが「モダン」であったとしている。しかし、今や「大きな物語」は凋落し、一人ひとりが描く多様な「小さな物語」が並立する「ポ

スト・モダン」の時代になった、というのがリオタールの主張である。

(6) ポスト近代社会における物語の意味

以上、近代をめぐる思想を概観し、その問題点をみてきたが、それをまとめると次のように整理できる。

近代は、客観的で普遍的な思考を重視することで、合理性を手に入れた。我々が共通の「大きな物語」を確信し、それに則って生活を営むことで社会秩序を形成してきた。また、それを経済システムや国家・行政システムという「システム」として外在化させることで、システムが自律的に秩序を生み出す社会を成立させたのである。しかし、そのことによって自らと空間や社会との関係の意味を喪失させてしまった。

こうした状況が安定的に継続するならば問題は生じないが、今、大きな物語は凋落し、多様な価値観がぶつかり合う状況の中では、一人ひとりが主体的に社会に関わり、自らの意味を構築するとともに、お互いを尊重しながら相互行為によって自律的に秩序を形成していく努力が求められるといえる。そのために、自らの「物語」を形成し、ともに語り合うことを通じてまちづくりへと結びつけていく新たな計画論が求められているのである。

3. 生活マスタープランと都市計画マスタープラン

(1) まちづくりオーラル・ヒストリー

こうした「物語」を核とした計画論は、どのように構築すればいいのだろうか。その手法論として、まず、後藤春彦⁷⁾が提唱する「まちづくりオーラル・ヒストリー」が手がかりとなるだろう。

オーラル・ヒストリー研究は、口述された内容を資料として分析、考察を行っていくものである。口述を資料とすることで、出来事に関わる人々の心的状況やその変化の過程、それに関わる思考形態や行動様式を明らかにできる。それをまちづくりに援用したものが「まちづくりオーラル・ヒストリー」である。

後藤によると「『まちづくりオーラル・ヒストリー』とは、単なる口述史ではなく、まちづくりにおいて地域の将来像を構築するために、『役に立つ過去』を活かした『懐かしい未来』を描くことを目的とした計画技術」である。「語り手の人柄や、語られた時代の空気やまちの雰囲気など、かたちにならない『弱い語り』を語り手と調査者との対話によって言語化する作業を行い、語り手の記憶を「言葉」として採集する」のである。まちにおける自らの物語を、過去から将来にわたって語ってもらうことが「まちづくりオーラル・ヒストリー」であるといえる。

(2) まちづくり人生ゲーム

また、実際に計画策定にむすびつけた方法論として、伊勢市都市計画マスタープラン策定の際に活用された「まちづくり人生ゲーム」が挙げられる。後藤春彦や浅野聡らによって開発されたその手法は、進学、就職、結婚、出産、子育て、定年退職など人生の様々な局面における選択肢を予め用意し、ワークショップ参加者にそれぞれの場面における人生の選択を考えてもらうものである。

後藤ら⁸⁾はその特徴や意義について次のように説明している。「従来の計画策定の過程では、住民を高齢者、身障者、勤労者、学童といったように、顔の見えないある集団として取り扱うことが多かったが、逆に参加型まちづくりにおいては、主体としての個人一人ひとりからの視点を活かすことが、計画を策定する上で重要だと考えられる。そこで「一人の人生をトレースしながら、それぞれの世代が抱えるまちづくりのテーマや課題を認識していくことで、住民の本音や潜在的な意見を抽出できる」との仮説をたて、一人の人生をガイドラインとする「ゲーム」を組み立てることにより、個人の人生という時間軸によって計画の総合化、体系化がはかれることを目指した。」

まちづくり人生ゲームは、まちに関わる自らの物語を、ゲームによってあきらかにしていく手法であるといえる。

(3) 生活マスタープランから都市計画マスタープランへ

つぎに、筆者が関わった計画策定の事例として「茨木市都市計画マスタープラン」を紹介する。ここでは、第1部「まちづくりビジョン」と第2部「都市づくりプラン」の2部構成とした。「都市づくりプラン」は従来の都市計画マスタープランに相当するものであるが、その前に「まちづくりビジョン」を策定し、それを「都市づくりプラン」に結びつける構成である。

まちづくりビジョンは、市民自らが将来の暮らし方を描いたものである。市民レベルの議論でも、まちづくりというとすぐに具体方策が語られるが、それはあくまでも手段であり、背景には本来の目標である「暮らしの姿」があるはずである。たとえば、「地域に図書館が欲しい」というニーズがあるが、それは「身近でたくさんの本が読みたい」という生活像を実現するためのひとつの手段として図書館の建設があるということである。そこで手段・方策を考える前に、まちづくりの目的・目標としての「暮らしの姿」を描いていくことが必要である。10年後、20年後の「暮らしの姿」を思い描き、語り合いを通じて調整を図り、生活マスタープランに仕上げていく、それが「まちづくりビジョン」である。

茨木市の場合、マスタープラン策定に先立ち、「市民まちづくり会議」を立ち上げ、公募で集まった市民46名

が6班に分かれ、1班あたり7〜8名になってワークショップ形式で議論を重ねていった。そして、議論内容を「まちづくりビジョン(案)」としてとりまとめた。「まちづくりビジョン(案)」は6つの班のまとめを合併したものとされており、1班は「人持ちでつくるつながるまちづくり」、2班は「“元炭”からのまちづくり」、3班は「歩いて楽しい安心して歩けるまち」、4班は「人カタウン」、5班は「あいくる挨拶あふれるまちづくり」、6班は「歩くことによるまちづくり」というタイトルで内容を取りまとめた。

策定委員会では、市民まちづくり会議の提言として出された「まちづくりビジョン(案)」をたたき台として議論を重ね、「まちづくりビジョン」にまとめていった。ビジョンでは、まちづくりの理念として「人持ち」でつくる「人カタウン」茨木が謳われている。これは、ビジョン(案)に示された1班と4班のキーワードを組み合わせたものである。そして、まちづくりの基本方針として、以下の12の項目を「まちの将来像」として設定した。

- ① 人が育ち、人を育てるまち
- ② 挨拶があふれるまち
- ③ 「人持ちになろう」が合言葉のまち
- ④ たのしく散歩ができるまち
- ⑤ 夢に向かってチャレンジができるまち
- ⑥ 色々なくらしができるまち
- ⑦ なりわいを大切にするまち
- ⑧ 地元で循環するまち
- ⑨ 茨木のエエもんを育むまち
- ⑩ 身近な自然を守り、使い、育てるまち
- ⑪ 人に優しい交通システムを取り入れるまち
- ⑫ 今あるものを工夫して活かすまち

そして、「まちづくりビジョン」を実現していくために、市としてどのようなことを行っていくかを記述したものを「都市づくりプラン」としてとりまとめた。

4. まとめ

以上、本論文では、「物語」を核として、空間やまちと人間をつなぐ「生活」をまちづくりに反映する意義や方策について検討を加えてきた。

マックス・ヴェーバー⁹⁾は、近代の特徴を「形式合理性」と見なしたが、その一環として近代都市計画も合理性を原理として官僚制にもとづく国家・行政システムによって実施されてきた。しかし、ポスト近代社会に入り、住民主体のまちづくりを展開するためには、「生活世界」に根ざした新たな計画原理が必要とされる。その手がかりとなるのが「物語」であるといえる。場所で展開される自らの生活を物語として語り、それを重ね合わせまちの将来像に紡いでいくことが大切だといえよう。

参考文献

- 1) 見田宗介：社会学入門，岩波書店，2006。
- 2) 中村雄二郎：臨床の知とは何か，岩波書店，1992。
- 3) Husserl, E. G. A. : Die Krisis der europäischen Wissenschaft und die transzendente Phänomenologie, Philosophia 1, 1936.
- 4) Habermas, J. : Theorie des kommunikativen Handelns, Frankfurt a.M. 1981.
- 5) 玉野井芳郎：生命系のエコノミー 経済学・物理学・哲学への問いかけ，新評論，1982。
- 6) Lyotard, J. F., : La condition postmoderne , 1979.
- 7) 後藤春彦，佐久間康富，田口太郎：まちづくりオーラル・ヒストリー ―「役に立つ過去」を活かし、「懐かしい未来」を描く，水曜社，2005。
- 8) 岡村竹史，後藤春彦：住民参加型ワークショップによる総合的・体系的計画づくりへの試み―「まちづくり人生ゲーム」の提案と検証，日本建築学会学術講演梗概集，1996。
- 9) Weber, K. E. M., : Die protestantische Ethik und der 'Geist' des Kapitalismus, Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik 20 (1904), and 21 (1905).

CONSIDERATION ABOUT MEANING OF STORY IN COMMUNITY PLANNING

Takahiro HISA and Akiyo TANAKA

It can be said that narrative is constructed through life, if narrative is caught to relation about the space and person. Then, in this thesis we consider how "life" that ties space and person can be reflected in the community planning. It is important to consider the measure for making the life master plan before making the city planning master plan and tying to the city planning master plan, for doing city planning that makes the best use of the narratives and being strengthened such a relation that was thin by modernization. We want to point out that a oral history is effective as the technique. For clarifying such points, in this paper, after the meaning of the narrative in community planning is considered, and how the narratives in community planning was transformed by the modernization is examined, the technique for regaining the narratives is examined.